川本玲子（かわもと・れいこ）
一九七二年東京生まれ。トロント大学文理学部卒業（英文学）。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学（英文学）。二〇〇二年四月より一橋大学大学院商学研究科専任講師。専門は二〇世紀イギリス小説と広義のナラティブ論。最近では、物語行為を脳科学の見地から再検討し、「物語らずにいられない」人間の本質とモダニズム以降の小説のあり方を関連づけることをテーマにしている。主な論文は中野知律・越智博美編著『ジェンダーから世界を読むⅡ――表象されるアイデンティティー』所収「妄想と創造のあいだ――C・P・ギルマン『黄色い壁紙』再考」（明石出版、二〇〇八年）、"Crime and Creativity: The Anti-Imagination Novels of Muriel Spark" (*Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences* 49, 2008) など。

桑瀬章二郎（くわせ・しょうじろう）
一九六八年京都生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。パリ第七大学博士。立教大学文学部准教授。専門は一八世紀フランス文学・思想（とくにジャン＝ジャック・ルソー）。ルソーの『告白』出版後のフランスでの受容について調査したLes Confessions *de Jean-Jacques Rousseau en France (1770-1794). Les aménagements et les censures, les usages, les appropriations de l'ouvrage* (Honoré Champion, 2003) で、二〇〇四年、渋沢・クローデル賞特別賞。その他自伝について論じたものとして、「自己のフィギュール――ジャン＝ジャック・ルソーと「肖像」」、『肖像と個性』（春風社、二〇〇八年）、「ある婦人の肖像――ルソー――ド・ラ・トゥール夫人書簡における自己のフィギュール」、『立教大学フランス文学』（三六号、二〇〇七年）などがある。

坂井洋史（さかい・ひろぶみ）
一九五九年東京生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。一橋大学大学院言語社会研究科博士（学術）。東京大学文学部助手、一橋大学経済学部講師、助教授を経て、一九九六年より一橋大学大学院言語社会研究科助教授、二〇〇一年より同研究科教授。専門は中国現代文学史。研究開始当初は、巴金Bajinという作家を中心に、彼が影響を受けたアナキズムをはじめとする社会思想との関連から文学史を眺めるという、非文学的なアプローチを当然のことのようにして採ってきたが、九〇年代前半に同時代中国知識人の思想的奮闘に接して以来、モダニティの問題を中心に近代文学（史）、中国、中国文学を考えるようになった。爾来、実証風の「お勉強」は一切放擲し、より思弁的たらんと日々努めている最中。主な仕事に、『懺悔と越境――中国現代文学史研究』（汲古書院、二〇〇五年）、『陳範予日記』（学林出版社、一九九七年）、『巴金的世界』（山口守と共著、東方出版社、一九九六年）、『九月の寓話』（翻訳、張煒原著、彩流社、二〇〇七年）など。

中井亜佐子（なかい・あさこ）
一九六六年松江市生まれ。東京大学人文科学研究科修士課程修了。オックスフォード大学博士（英文学）。現在、一橋大学大学院言語社会研究科准教授。専門は英文学および批評理論。数年来ポストコロニアル文学・批評を中心に研究してきたが、目下は新機軸を求めて充電中。著書に『他者の自伝――ポストコロニアル文学を読む』（研究社、二〇〇七年）、*The English Book and Its Marginalia: Colonial/Postcolonial Literatures after* Heart of Darkness (Rodopi, 2000)。共著に『転回するモダン――イギリス

戦間期の文化と文学』（研究社、二〇〇八年）、『愛と戦いのイギリス文化史』（慶應義塾大学出版会、二〇〇七年）、『現代批評理論のすべて』（新書館、二〇〇六年）など。

堀尾耕一（ほりお・こういち）

一九七一年東京生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了（西洋古典学）。青山学院大学ほか非常勤講師。専門は古典修辞学史、いわゆるレトリックの歴史。古典期の法廷弁論や帝政期の学校教科書など、よりプラクティカルな文献群に焦点を当てることで、古典修辞学に通底する前近代的な「私」のあり方が浮き彫りになる、と信じている。主な仕事として、「プロギュムナスマタ文献の伝承について」（『フィロロギカ』第一号、二〇〇六年）がある。

三浦玲一（みうら・れいいち）

一九六五年生まれ。アメリカ文学、ポストモダニズム。東京大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。『ポストモダン・バーセルミ』（彩流社）にて、二〇〇六年に、名古屋大学大学院国際言語文化研究科より博士号（文学）を取得。二〇〇一年より、一橋大学大学院言語社会研究科准教授。共編著に、『文化アイデンティティの行方』、『からだはどこにある』。翻訳に、ドナルド・バーセルミ『パラダイス』、ウォルター・ベン・マイケルズ『シニフィアンのかたち』。参加論集に『現代批評理論のすべて』、『レイ、ぼくらと話そう』等。ミシェル・フーコーの言う生政治、統治性といった概念から、冷戦期とポスト冷戦期のアメリカ文学・文化の比較すること、その比較から、現代社会のグローバルなイデオロギーとしての（ネオ）リベラリズムと文化表象の共犯関係を考察することが、現在の研究課題。

森本淳生（もりもと・あつお）

一九七〇年東京生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。ブレーズ・パスカル＝クレルモン第二大学博士（フランス文学・文明）。京都大学人文科学研究所助手を経て、二〇〇五年九月より一橋大学大学院言語社会研究科助教授（二〇〇七年四月より准教授）。専門はフランス文学・思想、とくにポール・ヴァレリーの『カイエ』を思想史的・心理学史的に読解し、それを彼の詩作品、とりわけ『若きパルク』（一九一七年）に接続することを主なる課題としてきたが、近年はジャック・ランシエールなどを参照しながら、一八世紀後半以降の「近代文学」の表象空間の構造をナルシシズムとメディアの観点から解析するという妄想に近い野望を抱くようになる。主な仕事に、『小林秀雄の論理――美と戦争』（人文書院、二〇〇二年）、『未完のヴァレリー――草稿と解説』（田上竜也と共編訳著、平凡社、二〇〇四年）、*Paul Valéry. L'Imaginaire et la genèse du sujet. De la psychologie à la poétique*（ブレーズ・パスカル＝クレルモン第二大学博士論文、二〇〇五年）など。

安田敏朗（やすだ・としあき）

一九六八年、神奈川県逗子市池子に生まれる。高校のとき、池子米軍住宅建設問題が起こる。建設容認市長のリコールを受けて当選した建設反対の新市長を選んだ民意を防衛施設局が足蹴にしたときから、国家への信用を失う。さらにその市長が建設戸数削減を成果のように誇ったときに、権力の腐敗というものを実感する。一九九一年東京大学文学部国語学科卒業。（株）東芝勤務。一九九六年東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程学位取得修了。博士（学術）。同年、京都大学人文科学研究所助手となる。森本淳生氏とはこのときから同僚。二〇〇一年から、はからずも一橋大学大学院言語社会研究科教員。「近代日本言語史」を自称し、関心のおもむくまま、本を書き散らかす。二〇〇六年以降の単著は、『金田一京助と日本語の近代』（平凡社新書、二〇〇八年）、『国語審議会――迷走の60年』（講談社現代新書、二〇〇七年）、『「国語」の近代史――帝国日本と

国語学者たち』（中公新書、二〇〇六年）、『統合原理としての国語――近代日本言語史再考Ⅲ』（三元社、二〇〇六年）、『辞書の政治学――ことばの規範とはなにか』（人文書院、二〇〇六年）。

特集への編集後記

「私」というものにこだわり続けたポール・ヴァレリーを専門にする者として「自伝」は必ずしも無縁なテーマではないにもかかわらず、それでも決して専門家とは言えない私がこのような特集を組むことになったそもそもの遠因は、中井さんがポストコロニアル文学を研究する中で自伝に関心をもち、自伝について共同研究をやろうと提案されたからだったのだが、もともと私語りに興味がなかったわけではなく、というよりも近代（現代）におけるナルシシズムとメディアの間には本質的な関係があるというのはここ数年の研究テーマですらあって、たくさんのタレントや無名の人々が実践しているあの写真と空白だらけの弛緩した言葉からなるブログなどを見ると、いかに近代人（現代人）が自分をメディア空間に表象することにこだわっているのが理解されるのであり、そのような実践の一種として「自伝」というものも存在しているのだろうとは漠然と予想がついてはいたのだけれども、ではいざ研究をしてみようということになると、自伝の数は膨大でかつ内容は茫漠としており、ルジュンヌはほとんど使い物にならず、かといって別の有効な解釈格子が容易にみつかるわけでもないので、とりあえずは著名なテクストを読んで素手で考えてみようかということで個人的には始めてみたわけだったのだが、所詮一人でできることは限られているのであり、今回座談会と論集というかたちで興味深い発言と論文を集めることができたのは、研究の出発点としてはかなり有意義だったと言えるわけで、その意味でも、参加して下さった方々には感謝の念のたえることなく、とりわけ、座談会の錯綜したやり取りを文字におこしすっきりと整理して下さった武村知子さんには深く深くお礼を申し上げねばならないのだが、今後、こうした共同による自伝研究は引き続き実践していくつもりであり、海外の研究者なども輪に引きこんで、すでにいくつかの企画を考えているところで、言社研関係者の方々におかれても是非これからも暖かい眼で見守っていただくとともに刺激的なる視角からの切り込みを期待していただきたく、あらためて頑張らなければと思う今日この頃であった。

（紀要編集委員長　森本淳生）